

国立国語研究所学術情報リポジトリ

高知県方言の副助詞「バー」の意味機能

著者	上野 智子
雑誌名	日本語科学
巻	5
ページ	89-108
発行年	1999-04
URL	http://doi.org/10.15084/00002010

高知県方言の副助詞「バー」の意味機能

上 野 智 子

(高知大学)

キーワード

副助詞, バ(ー), 程度, 限定, 高知県方言

要 旨

程度を表す「ばかり」は古く奈良時代に用例が認められ、先行研究によれば、時代を下るにしたがって限定の意味機能へ移行し、現代ではさらに強調機能が加わったと考えられる副助詞である。高知県方言では、この「ばかり」から変化したと言われる「バ(ー)」が、程度・限定の意味で全年層男女に頻用されるが、強調の意味機能は「バッカリ・バッカシ」が担い、現代共通語のみならず現代諸方言にも認められる「ばかり」の一般的变化は観察されない。つまり、高知県方言においては、同じ「ばかり」から変化した方言事象「バ(ー)」と「バッカリ・バッカシ」とがほぼ棲み分けられていることになる。

しかし、周囲の四国・中国地方方言においては「バー」が「ばかり」からの変化形であることを裏づける音変化形が散在するものの、高知県方言と同じ機能を有する「バー」が微弱で、程度から限定・強調への移行状態を示す事象が主である。こうした瀬戸内海域を中心とした「ばかり」の変化形の存立は、周辺方言としての高知県方言の「バ(ー)」の古さを首肯させるが、音声上、最も進行した変化形「バ(ー)」の活発な状況は、古態性の残存というより、むしろ、高知県方言における「ばかり」の自己改新の姿と見るのが妥当であろう。

1. 問題の所在

最近、耳にした当該方言の言いぐさに、

トサベン ユータラ メッタ コジャンチ ショー ユー バー。

というのがある。共通語に訳せば「土佐弁といたら、メッタ (とても困った), コジャンチ (たいそう), ショー (とても), ユー (～ている), バー (ぐらい)」, 現在20代前半世代の若年層が6年前の10代を回想して蘇った、自分たちが用いる方言の目玉といった趣きである。実はここに本題の「バー」が最後に登場していて、誰が言い出したのかは不明だが大いに興味をそそられる。なるほど、高知ではこの「バー」が全年層・男女をとわずさかんに口にのぼる。例えば、次のように。

○フツカバー ナンチャ セザッタキ。

二日ぐらい何もなかったから (体がだるい)。(中女一同)

○ハラギリバッカシ ヨニンバー。

(見舞に行ったのは) 腹の手術ばかり 4人ぐらい。(初老女一中女)

「二日ぐらい」「4人ぐらい」と、具体的な数量を「バー」をしたがえることによってぼかす言い

方とも受け止められる一方で、こんな「バー」も聞かれる。

○コレ^{バー}ヤッタラ ダイ^{ジョー}ーブ。

これぐらいだったら（肥る心配はなく）大丈夫。（中女一同）

「これぐらい」は「これだけ」とも解釈される可能性をもち、

○タッタ コレ^{バー}ノ モン ヨ。ただこれだけのものよ。（中女一同）

になると、もはや「これぐらい」ではなく「これだけ」の意味へ移行している。つまり、「バー」には大体の程度を表す機能から限定機能への推移が観察されるのである。

この「バー」についての出自に関する記述は土居(1985)『高知県方言辞典』藤原(1988)『瀬戸内海方言辞典』に見られ、ともに「ばかり」と説明されている¹。また、国立国語研究所(1989)『方言文法全国地図 第1集』(以下、GAJ)では

47 皮^{だけ} (食べた) 48 (食って) 寝る^{だけ} なら

49 雨^{ばかり} (降っている) 50 百円^{くらい} (使った)

の4図に、いずれも橙色の符号があたえられた、〈baari〉〈bari〉〈baa〉〈bee〉などの語群が分布域を少しずつ異にしながら使用されている様子が観察される。これらはいずれも赤色の符号があたえられた〈bakari〉系統の「bakari, bakasi からkが脱落した形、およびその変化形」(解説1 p.202)と捉えられており、「ばかり」のたどってきた意味の変遷が共時的に投影された姿と読める。

「ばかり」は、先学の研究、此島(1966) 岩井(1970~1974) 西田(1977) 安田(1977) 田中(1977) 高瀬(1985) 柳田(1992) によれば、次のような意味の変遷を経たことになる。

奈良 平安 鎌倉 室町 江戸 現代

程度

限定

強調

GAJの4図は47・48は限定、49は限定と強調、50は程度の意味を表す項目と理解される。関連事象だけを略図にして示す(図1)。まず、47図では〈bari〉が東北地方の広い範囲に、東北・関東地方の一部に〈bee〉、岡山5地点と高知1地点に〈baa〉、奄美・沖縄地方に〈bee〉〈be〉などがある。48図では、東北地方に〈bari〉、関東地方にはなく、岡山3地点広島1地点高知4地点に〈baa〉、奄美地方に〈bee〉など、高知を例外として、47図よりも分布域は狭くなっている。49図では、北海道・東北地方に〈bari〉が、関東地方に〈bee〉、淡路島・小豆島・岡山・広島(備後)と高知1地点に〈baa〉、奄美・沖縄地方に〈bee〉などがあり、この系統では最も分布域が広い。50図では、東北地方に〈bari〉、高知県全域に〈baa〉、奄美・沖縄地方に〈bee〉があるが、あとは関東地方と奄美・沖縄地方に〈bee〉と岡山県に〈baa〉が2・3地点ずつ見られる程度であり、4図の中では最も分布域が狭い。これらを総合すれば、50(程度) 48・47(限定) 49(限定と強調)の順序で新しく変遷してきたものと考えられる。

本論では、最も古い意味機能がいまだに機能していると判断される、高知県方言の副助詞「バー」について、その用法を検討し、「バー」の意味機能の広がりや他の地域に認められる「バー」との相違点など、この語を取り巻く問題点について考察する。用いる資料は、高知市内で自然会話か

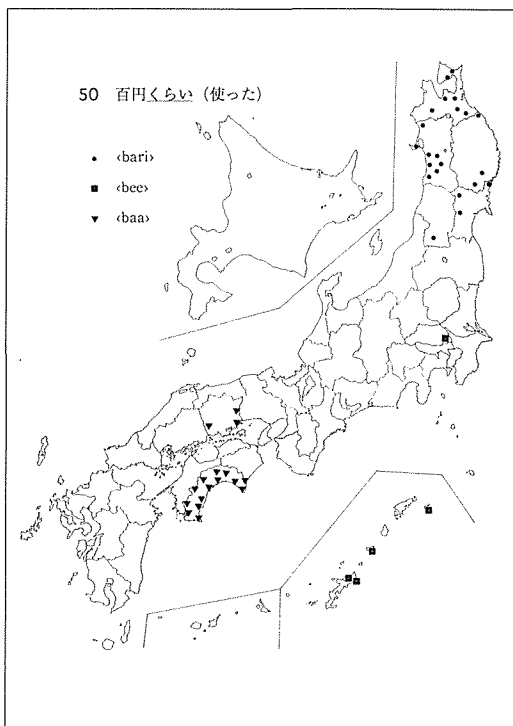
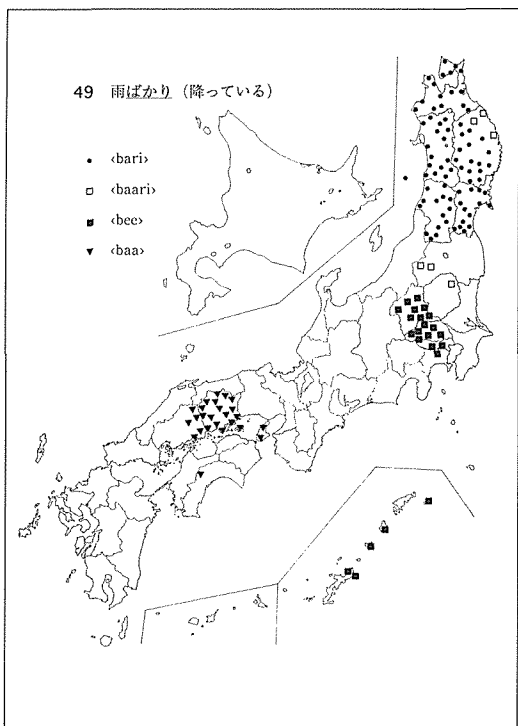
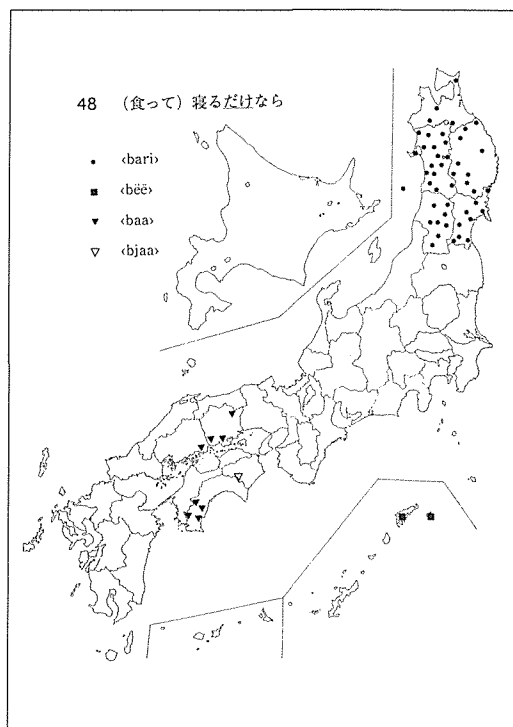
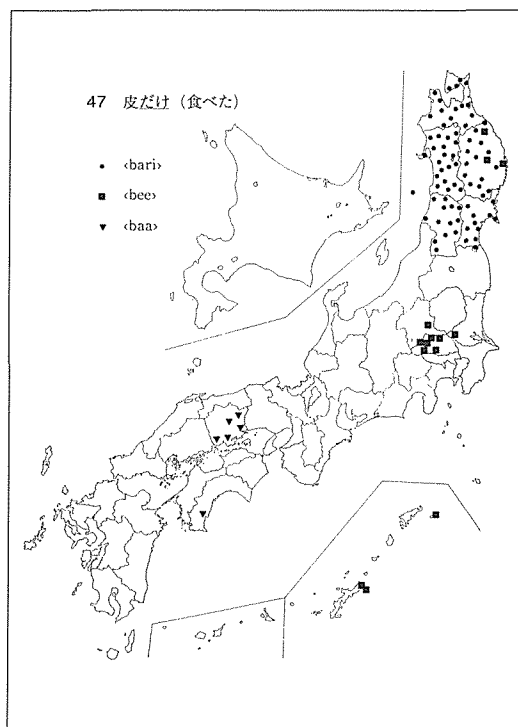


図1 『方言文法全国地図 第1集』所収の分布図を関連事象のみ略図化したもの

ら得られた方言文例と県西部の四万十川流域で実施した、上野(1996) 所収の「1000円分」「500円ほど」「皮だけ」「100円しか」「雨ばかり」「そんなに」「いくつ」「いくら」の8項目である。

2. 「バー」の用法と意味機能

「バー」の基本的な用法を整理してみよう。まず、具体的な数量に下接した用例が多い。

○チョット オクレテキタ。ニフンバ。 少し遅れてきた。2分ぐらい。(初老女一同)

○ジューニジハンバヤ ナイ? (今) 12時半ぐらいではない? (中女一同)

○ミッカバー ジュージカンガ アッタ ガッテ。

(修学旅行では) 三日ぐらい自由時間があったんだって。(青女一同)

○ニジューサンネンバー マエ。(新婚旅行は) 23年ぐらい前。(中女一同)

「2分」「12時半」「三日」「23年」など時間に関するもので、その長短は問わない。

○トシオ ジュッサイバー モロータヨーナ キガ スル。

(花粉症にかかったら) 年を10歳ぐらいもらったような気がする。(中女一同)

○ミンナ トーバー ワカイ。(最近の女性は実年齢より) 10歳ぐらい若い。(初老女一同)

○リサチャンバーカラ ナナジューマデ。

りさちゃんぐらい(の年齢) から70歳まで。(初老女一中女)

○ジュークバノ オンナノコ。 19歳ぐらいの女の子。(初老女一中女)

「10歳」(漢語・和語) など年齢に、

○リョコウ イタラ ニキロバ スグ ヲトル。

旅行へ行ったら 2 kg ぐらいすぐ肥る。(中女一同)

○イッテキバ ノコシチョッタ ガ。(酒を) 一滴ぐらい残していたの。(中女一同)

○サイズガ ヒトサイズバ チガウ。(孫の腹とは) サイズが一サイズぐらい違う。(中女一同)

○ヨンテンゴインチバーノ テレビガ アレバ。

(オリンピックを見るのに) 4.5インチぐらいのテレビがあれば……。 (青男一中男)

「2 kg」「一滴」「一サイズ」「4.5インチ」など、外来語の単位を含む重量・容量・長さに、

○アレデ ナナヒャクエンバーヤッタ オモウ。

(寿司と蕎麦のセット) あれで700円ぐらいだったと思う。(初老女一中女)

○センエンバー ヤッチョカント ネー。

(子供の小遣いは) 1000円ぐらいやっておかないとねえ。(中女一同)

○ニマンバージャオ? (銀行の利子は) 二万円ぐらいだろう? (中女一同)

○カッタラ ヨー, イチマンバーニ ナルヤン。

勝ったらさあ、(パチンコは) 一万円ぐらいになるじゃない。(青女一同)

「700円」「一万(円)」など金額に、

○ゴジュッケンバー タッチューロー。 50軒ぐらい建っているだろう。(老男一老女)

○ソレー サンババー コーチョッテ。

それ(モロヘイヤ)を三把ぐらい買って置いて。(青女一同)

「50軒」「三把」など、他の助数詞にもほとんど例外なく、しかも数量の大小に左右されることなく接続する。大体の程度を表すのが「ばかり」本来の機能であるが、当該方言では具体的な数量と結びつきやすい傾向、いいかえれば、数量で言い切らない表現への好みが見られる。数詞と「ばかり」の結びつきは、鎌倉時代以降、程度の意味用法に多いという安田(1977)の指摘²が示唆に富む。

次に、指示語との接続例が多い。「これ」の場合、

○ウズマキニ ナッチョッタ。コレッバー。

(ひどい腫れとかぶれで皮膚が) 渦巻きになっていた。これぐらいの。(初老女-中女)

○コレバノガ ゴセンエン ユータラ ネー。

これぐらいのが5000円といったらねえ。(中女-店員)

「それ」の場合、

○ソレバーデワ タベレン テ。(650円) それぐらいでは食べられないって。(中女-同)

○ソレバー デタラ エイ。ソレバー デタラ タノシー ネー。

(汗が) それぐらい出たらいい。それぐらい出たら楽しいねえ。(初老女-中女)

○ソレッバーノ コト ジブンデ シー ヤ。 それぐらいのことは自分でしなさい。〈教示〉

「あれ」の場合、

○アレバーノ ヤマヤッタラ ジョートー。

(筍が出る) あれぐらいの山だったら上等。(初老女-中女)

○アレッバーノ ヒトガ イキユーノニ。 あれぐらいの人が行っているのに。(中女-同)

○アレッバー ドリョクスル ワリニワ ヤセン ネー。

あれぐらい努力するわりにはやせないねえ。(初老女-老女)

「どれ」と「いつ」「いくつ」の場合、

○アト ドレバー? あとどれぐらい(時間がかかる)?(青女-同)

○キノー カエル トキ コレ ドレッバー アッター?

きのう帰る時、これはどれぐらいあった?(中女-同)

○イクツバーノ ヒト? いくつぐらいの人?(中女-同)

○イツバー? いつぐらい?(中女-青女)

など、どの指示語にも接続し、しかも「バー」のみならず、「ッバー」「ッパー」とそれぞれの短呼形「ツバ」「ツパ」がそなわって実に活発な様相を見せている。

他の名詞では、

○キョーバー ミカン デタ コト ナイ。

今日ぐらいみかんが出た(売れた)ことはない。(初老女-中女)

○マイニチ クル ユータラ ワタシバー。

毎日(ここへ)来るといったら私ぐらい。(中女-同)

○カシキリバ ヨーコチャン、スイチュー デー。

貸切(といってい) ぐらい、ようこちゃん、(風呂場が) すいているよ。(中女-同)

体言ばかりでなく、用言にも接続し、形容詞では、

○アンタ ホント ヨー アセ デル ネー。ウラヤマシーバー。

あんた、本当によく汗が出るねえ。うらやましいぐらい。(中女一同)

○エイバー シャベリヨッタ。 たっぷりしゃべっていた。(中女一同)

動詞では、

○タルバー キーキー ユーテ……。

いやになるぐらい(文句を)きいきい言って……。 (中女一同)

○ビックリスルバ アツイ。 ココ。 驚くぐらい暑い。ここは。(中女)

○コレイジョー ヤレンチューバー ヤッチュー ネー。

(厚生省の汚職は)これ以上できないというぐらいやっているねえ。(中女一同)

さらに、助動詞にも接続する。

○メガ アカンバー。 目があかないぐらい(疲れた)。(中女一同)

○セイカツニ コマランバー ハイレバ ジョーデキ ヨー。

生活に困らないぐらい入れば上出来よ。(初老女一中女)

動詞・助動詞の用例は「タル」(飽きる)「ビックリスル」(驚く)「メガ アカン」(目が開かない)などのように、卑近な例えとして程度を表しており、当該方言の比喩表現になくてはならない副助詞である。「タルバー」は慣用句としてすでに定着していた言い回しとなっている。

上接語に関しては、以上のように、名詞(数詞・助数詞・代名詞・普通名詞・固有名詞)形容詞・動詞・助動詞の用例が認められた。下接語に関しては、何も下接しない例のほか、格助詞(は・の・に・で・と・から・まで)副助詞(しか)終助詞(か・よ)と断定の助動詞(ヤ・ジャ)への接続例が得られている。格助詞・終助詞・断定の助動詞の例はすでに出てきているので省略するが、限定を表す副助詞「しか」への接続例を見てみたい。

○アテワ ニジッペンバーシカ ハイッテナイ。

私は(風呂に)20分ぐらいしか入ってない。(初老女一中女)

○サンジューメートルバーシカ ナイ デー。 30mぐらいしかないよ。(少男一同)

○ヒャク キーテモ ホント ホラ ゴバーシカ ノセテクレン。

(新聞の取材などは)百聞いても、ほんとに、ほら、五ぐらいしか載せてくれない。(中女一同)

○コレバーシカ チインデスケド。

(方言の用例が)これぐらいしかないんですけど。(青女一上野)

「しか」はあとに否定辞をとまって限定を表す副助詞である。「バーシカ」を共通語訳するなら「ぐらいしか」「だけしか」が適訳であろう。上接語は具体的な数量と指示語に限定されるようである。

その一方で、「だけ」と受け取られる限定の意味合いで用いられた「バー」単独の用例が認められる。

○ヨルバーデ ヨ。 夜(かけた携帯電話代)だけで(一ヶ月一万円)よ。(中女一同)

○コレバー カネー? コレバー。これだけかねえ? これだけ。(中女→中女)
 ○オタクサン コレバー? お宅さん、これだけ?(初老女→上野)
 ○ソレバーノ モン ヨ。それ(口先)だけのことよ。(中女→同)
 ○アルバー ダソー カ? (缶ビールを)あるだけ出そうか?(初老男→中男)
 ○アンマリ ヒマヤキー キタババーノ コト。あまり暇だから来ただけのこと。(青女→同)
 「夜だけ(かけた携帯電話)」「これだけ(の買い物)」「それだけ」「あるだけ」「来ただけ」というように、ここには大体の程度というより、限定に転じた意味合いが濃厚である。はじめに確認した「ばかり」の意味の変遷でいえば、限定の意味合いへより進んだ変化とみなされる。当該方言の「パ(一)」は、程度を表す機能に加えて、このような限定の意味機能をも備えており、否定辞をとまなう強い限定を表す「しか」の接続しやすい土壌がすでに形成されていることがわかる。しかも、ここでは具体的な数量が上接しない点に注意したい。

以上を簡単にまとめると次のようになる。____は、現時点までに確認できた限定用法を意味する。

〈語形態〉 バー・バ・パー・パ

〈接続形式〉 上接語: 名詞(数詞・助数詞・代名詞・普通名詞・固有名詞)

 形容詞・形容動詞・副詞・動詞・助動詞・助詞

 下接語: 格助詞(は・の・に・で・と・から・まで) 副助詞(しか)

 終助詞(か・よ) 断定の助動詞(ヤ・ジャ)

〈意味機能〉 程度・限定

- ① 程度の意味機能は数詞を用いた数量表現(長さ・重さ・容量・個数・金額・年齢・時間など)において顕著である。
- ② 数詞を用いた数量表現を除いて、程度と限定の二つの意味機能は、さまざまな品詞との結合が可能である。
- ③ 「パ(一)」は指示代名詞に下接する際、「パ(一)」に変化しやすい。

付言すれば、使用者は性別・年齢を問わず広範囲にわたり、品位は中程度、しかも場面上的の制約を受けにくい。音変化形の「パー・パ」は「バー・バ」よりも軽快な感じに受け止められる。親しい者どうしで気分が高揚したときなどに出やすい。「ッバー」や「ッパー」への音変化は、指示語のラ行音節の後にしか起らず、促音の添加は強調効果を伴っている。

3. 『四万十川流域言語地図』における「バー」

高知県は大きく、東ことばと西ことばの地域とに二分されるが、「バー」については先行文献によっても東西差に関する指摘は認められない。例えば、『高知県方言辞典』には「全地域」とあり、この事象においては高知市の位置する東部と四万十川流域の位置する西部はなだらかに連続するものと判断される。実際の会話には、

○ワシバー ビンボナ モンワ オラン。 わしぐらい貧乏な者はいない。(老男→中女)

○コレバー ナマエ イレチョッタラ トリャー セン。

これぐらい（たくさん）名前を書いていたら取りはしない。（中女一老女）

○グーバー スッテ イルバー アニキニ……。

食べる分だけ精米して要るだけ兄貴に（送ってもらう）。（老男一中女）

のような例があり、中村市や幡多郡十和村でも程度・限定の用法が認められる。西部のとくに土佐清水地方の方言集、沖本(1981)に記述がある³。

そこで、『四万十川流域言語地図』に現れた「バー」をとりあげてみたい。関連の分布図は次の8項目である。なお、分布図はB・Cのみ掲げる（図2）が、2図に現われる方言事象の符号の統合化をはかるため、改図を行った。複合形態に同一の符号を与えているのは本論の主旨にそわせるための便宜的方法である。分布図では第1回答のみを符号化したが、B（程度）では「バー」「バ」「ガバー」が計34地点、C（限定）でも「バー」「バ」が計29地点で、ともに高知県側に分布していて愛媛県側には認められない。

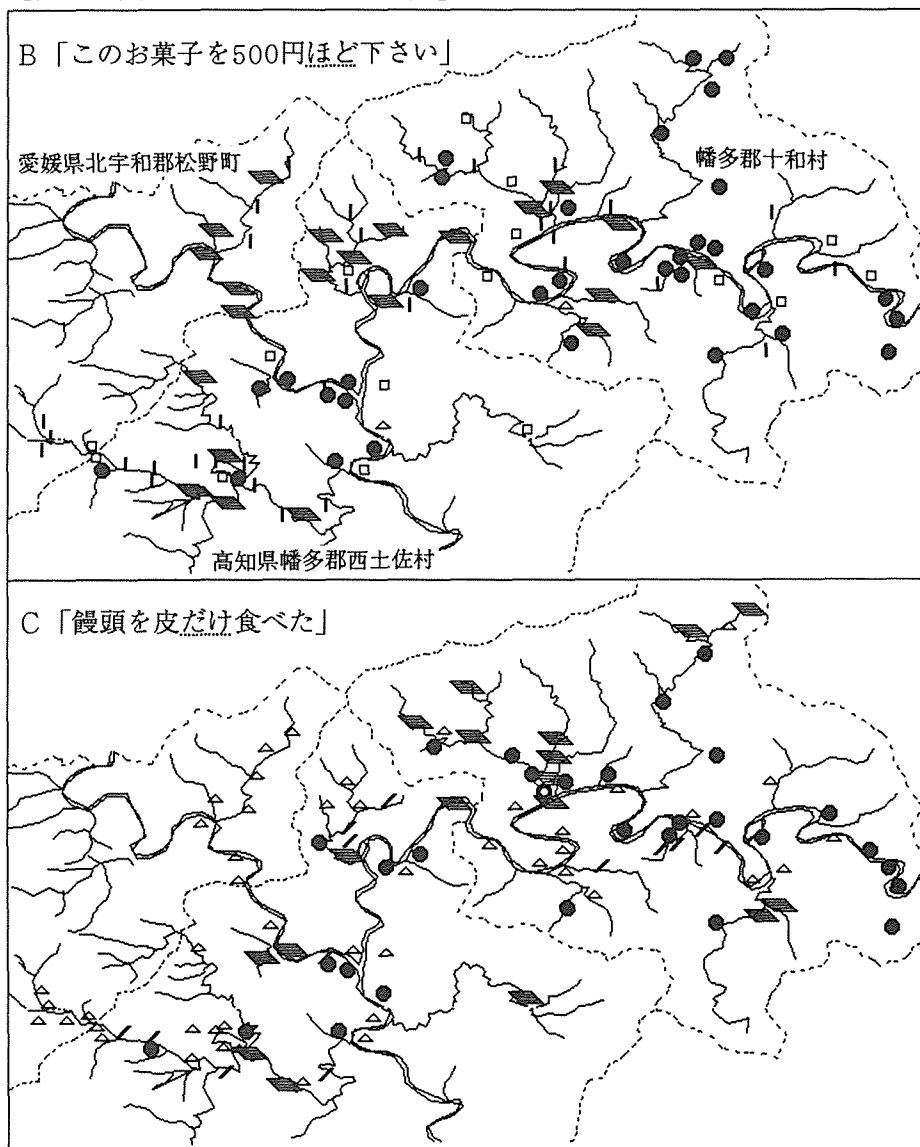
- | | |
|----------------------------|--|
| A 「みかんを1000円分 <u>下</u> さい」 | B 「このお菓子を500円 <u>ほど</u> 下さい」 |
| C 「饅頭を皮 <u>だけ</u> 食べた」 | D 「100円 <u>しか</u> ない」 |
| E 「雨 <u>ばかり</u> 降って困る」 | F 「 <u>そんな</u> に <u>せ</u> い出して働くとかたびれるよ」 |
| G 饅頭などの物の数を尋ねる（いくつ） | H 物の値段をきく（いくら） |

A～Hを地点番号ごとに総括してみると表のような結果が得られる。「ガ(ー)」「バ(ー)」「ダケ」「シカ」「バッカリ」「ホド」の6事象は▽●◇△○☆の符号に置き換え、項目間相互の関連をもたせることに努めた。しかし、「ギリ」「グライ」「ブン」「カチャ」「カシャ」、さらに「ガバー」などの複合形態は混乱をさけるためにカタカナ表記のままとした。複数回答は、回答順位にしたがって配置したが、2番目以降の回答であっても、使用頻度が高いと教示されたものは第1回答に繰り上げた。なお、地点番号は分布図の西（左側）から東（右側）へ移動し、1～5、35～42、計13地点は愛媛県北宇和郡松野町、6～34・43～56・62、計44地点は高知県幡多郡西土佐村、57～61、63～109、計52地点は幡多郡十和村に属する。

「バ(ー)」が最も多用されているのはBで全部で41地点、うち1地点は愛媛県、地点4の第3回答で、あとは高知県での回答である。「バ(ー)」に「～円分」の意の「ガ」（高知県ではきわめてさかんな共通語「の」相当の準体助詞）が上接した「ガバ(ー)」は高知県14地点で11地点までが東よりの高知県十和村での回答である。ちなみにAでは18地点の「バ(ー)」が認められるが、教示者の説明を参考にすると、「バ(ー)」は曖昧（A 9・59やB 71・77）であるのに対して、「ガ」は明瞭（A 57・71やB 77）であり、大体の程度を表す「バー」の意味機能が確認できる。

一方、限定のC・Dの場合はどうか。C「だけ」は39地点、D「しか」は5地点（「バーシカ・バシカ」は8地点）で、「バ(ー)」は「だけ」の方に優勢である。高知市で自然会話にも聞かれた「だけ」であるが、『四万十川流域言語地図』ではB「ほど」にも匹敵するくらいの勢いである点に注意される。否定をともなう「しか」には方言事象として別語「カシャ」が根強く、しかも、そもそも「予想していたのにそれがないという非存在を強調する」（高瀬(1985)）機能は「バー」本来の程度性にそぐわない。同じ強調で新しい機能と見られる現代共通語「ばかり」の強調、Eを見ると、「バ(ー)」はわずかに3地点で、「バッカリ」（73地点）が圧倒している。「バー」が「ばかり」

1	NR	(1)	2	I	ガ	(28)
3	I	(5)	4	□	ガグライ	(1)
5	●	(9)	6	▨	ガ朴	(5)
7	▨	(1)	8	□	グライ	(2)
9	□	(12)	10	□	グライガ	(1)
11	△	(1)	12	△	ダケ	(1)
13	●	(3)	14	●	バー	(22)
15	ブ	(1)	16	▨	朴	(12)
17	▨	(1)	18	▨	ホト	(2)
19	▨	(1)				



1	／	ギリ	(13)	2	●	ゴト	(1)
3	△	ダケ	(47)	4	●	バ	(1)
5	●	バー	(28)	6	●	バツカリ	(1)
7	▨	朴	(18)				

図2 『四万十川流域言語地図』所収「500円ほど」「皮だけ」を改図したもの

表 『四万十川流域言語地図』における「パー」の認められる文法項目

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	▽	▽	◇	△	○			
2	▽	▽	◇	△	○			
3	▽	▽	◇	△	○			
4	▽	ブン ▽ ●	◇	△	○			
5	グライ	グライ ☆	◇	△	○		ドノグライ、ドングケ	
6	ガグケ ◇ ▽	グライ、ガパー	◇	△	○	～●		
7	▽	ガパー、グライ	◇	△ ガチャ	パッカン			
8	▽	▽	ギリ	△	○	～☆		
9	グライ ●	▽ ☆	ギリ	パッカン	○			
10	ガヤ	☆	◇	△	○			
11	▽	▽	◇	△	○			
12	●	▽	●	グケカ ●	パッカン	～☆		
13	▽	☆	ギリ	ガチャ	○			
14	●	● ☆	◇	△	パッカン			
15	▽	ガグライ	◇	ガチャ	○			
16	▽	▽	◇	NR	パッカン	～☆		
17	ガホド	ホドガ ●	◇	△	パッカン			
18	▽	▽	(ゴト・ゴシ)	△	○			
19	▽	ガホド	◇ ☆	△	○			
20	▽	▽	●	△ ガチャ	○			
21	ガホド	▽	☆	△ ガチャ	○		ドノ～	
22	▽	▽	☆	ガチャ	○	～☆		
23	▽	☆ ▽	◇	△ ガチャ	パッカン	～☆		
24	▽	▽	ギリ ◇	ガチャ	○	～☆		
25	▽	●	●	ガチャ	○	～☆		
26	ガホド ▽	グライ ●	◇	△	パッカン			
27	▽	●	◇	△	○			
28	ブン、ゴグケ	ゴグケ	● ◇	△	○ パッカン			
29	●	●	●	△	●			
30	▽ ブン	● グライ	● ◇	ガチャ △	○	～☆		
31	ブン	▽	ギリ	ガチャ	パッカン	～☆		
32	●	●	ホド	パッカン	○	～●		
33	▽	ガパー	ホド	ガチャ	○	～●		
34	グライ ▽	グライ ●	◇	△	パッカン			
35	ブン	☆	◇	△	○			
36	ガホド	ガホド	◇	△	アガッ パッカン			
37	▽	☆	◇	グケカ	○			
38	▽	ガホド	◇	△	パッカン			
39	▽	▽	◇	△	○			
40	▽	▽	◇	△	○ パッカン			
41	ブンホド	☆	◇	△	○			
42	▽	▽ブン	◇	△	○			
43	ガグライ	グライ	◇	△	ヨッカン	～☆		
44	▽	●	◇ ●	△ ガチャ	○	～●		
45	▽ ガホド	☆ ▽	●	△	○	～☆		
46	ガパ ●	グライ ▽ ●	ギリ ●	ガチャ △	○	～● ～☆		
47	▽	ガホド ●	●	パッカン	○			
48	▽	▽	☆ ◇	パッカン	○			
49	▽	☆	ギリ ●	△	○			
50	ガホド	☆	◇	△	○			
51	ガホド	▽	◇	△ ◇	パッカン ○			
52	▽	☆	ギリ ◇	ガチャ	○	～☆		
53	▽	▽	◇	△	○			
54	▽	▽	◇	△ ガチャ	パッカン			
55	▽	●	●	グケカ、ガチャ	パッカン		タンボ パー、タンブ パー	
56	▽ ガグケ	☆ ◇ ▽	◇	グケカ ◇	○			
57	▽	グライ	◇	△ グケカ	パッカン		ドノグライ	
58	●	●	◇ ●	△	○			ドノ、タンボ
59	ブン ◇ ▽ ●	◇ ● ガパー	◇ ●	ガチャ	NR	～☆	タンボ パー	

	A	B	C	D	E	F	G	H
60	▽	☆ ▽	◇ ☆	△ ●	○	～☆		
61	ガホド	● ☆	● ☆	△	バツカシ			
62	▽	グライ ●	☆ ◇	◇ △	○	～☆		
63	ガグライ	☆ ▽	ギリ	◇	○	～☆		
64	▽	● ▽	◇	△	○			
65	▽	▽	◇ ●	△	○ バカリ			
66	グライ	グライ	◇	△ グライ	バツカシ、バカリ	ワレバ、～●	クラグライ	
67	▽	▽	バツカリ	◇	NR			
68	ガホド	ガホド	●	ガシヤ △ ●	アマガ フツゴマル	～☆		
69	▽	グライ ●	●	△	○			
70	▽	▽	☆	△ ガシヤ	バツカシ			
71	▽	●	●	ガシヤ	○			
72	▽	●	◇	△	○			
73	▽	▽	☆	ガシヤ	バツカリ			
74	● ▽	グライ	☆	△	バツカシ			
75	▽	▽	☆	ゴシヤ	アマガ フツゴマル			
76	▽	ガホド	☆	ガシヤ	バツカリ			
77	▽	▽ ●	☆ ◇	△ ゴシヤ	○	～☆	タンボ バ	
78	●	●	●	NR	●			
79	▽	▽	☆	ゴシヤ	バツカシ			
80	▽ プン グライ	▽ ◇	● バカリ ◇	△ バツカ	バツカシ			
81	☆ ▽	☆ ●	◇	△	○			
82	▽ グライ	ガバ ●	● ◇	△	○			
83	ブン、ゴシヤ ●	● グライ、ガホド	● ◇	バツカ	○ バツカリ	～● ～☆		タンボ バ
84	▽	ガバ	☆	△	バツカシ			
85	▽	ガバ	☆	△ ゴシヤ	○			
86	▽	ガバ	◇	ガシヤ	ヨツノ			
87	NR	NR	☆	NR	NR			
88	ガバ	ガバ	●	ガシヤ	バツカシ	～●		
89	●	●	◇	NR	○	～☆		
90	ガバ	● ガバ	●	△ ●	○			
91	● ガバ ▽	● ガバ ▽	● ◇	●	○			
92	▽	●	ギリ	ギリカ	● ○	～☆	ドレバ	
93	☆	▽	ギリ	ガシヤ	○			
94	▽	☆ ガグライ	ギリ ●	△	○ バツカリ	～☆		
95	▽	● ガバ	● ◇	ガシヤ △	○	～☆		
96	●	グライ ●	ギリ、バツカリ	△	バツカシ	～☆		
97	ブン ▽	●	◇	△	バツカシ		タンボ グライ	
98	▽	グライ	◇	△	○		ドレグライ	
99	▽	ガバ	☆	ガシヤ	○	～☆		
100	▽	▽ ● ☆	☆ ●	バツカ	○			
101	▽	● グライ	● ギリ、グ	ガシヤ	○	～☆	ドレバ	
102	▽	●	●	ガシヤ	○	～☆ ～●		
103	▽ プン	▽ グライ ●	◇ ●	△	○			
104	▽	▽	◇ ●	◇ △ ガシヤ	○	～☆		
105	カフリ ●	グライ ●	● ●	△ ◇ ガシヤ	○	～☆		
106	ガグライ ◇	グライ	● ◇	△	○	～☆		
107	● ▽	● ☆	●	△	バツカリ			
108	●	●	●	バツカ	○	～☆	タンボ バ	
109	●	ガバ	●	△	○		ドレグライ	
	●18 ☆2	●41 ☆20	●39 ☆18	●5	●3	●9 ☆32		

▽：ガ・ガバ ●：バ・バ ◇：ダケ △：カ ○：バツカリ ☆：ホ

項目

- A ～分 F そんなに
 B ～ほど G いくつ(物の数)
 C ～だけ H いくら(値段)
 D ～しか ※ A～Eはすべて、
 E ～ばかり F～Hは関連事象のみ

説明 A 9 パーはあいまい、きっちりなら千円

- A57 ガーはきまっている A59 パは不特定
 A71 ガは千円ちょうど A83 パーはホドと使い分けなし
 B17 ホドガは丁寧、パーは付き合いのある人
 B71 だいたい五百円の意、少々上下してもよい
 B77 ガははっきりしている、パーはぼんやりしている

出自だとすれば、強調の「バッカリ」は「バー」とは全く無関係に広がった可能性が強い。これが共通語の影響かどうかはさだかではないにしても、少なくとも古い意味機能とされる程度から限定への移行状態のまま、さらに強調へはあまり進んでいないと見られ、今後も「バー」の形態で強調へ移行する可能性は低いと考えられよう。

このほか、F・G・Hにも「バ(ー)」が観察される。曖昧性を特徴とするため、程度・分量を表す表現に頻用される傾向はすでに高知市でも確認したところである。A～Hをまとめると、「バ(ー)」に呼応しながら「ホド」の活発な様相が注意をひく。ちなみに、Bでは20地点、Cでは18地点、Fでは32地点で、「バ(ー)」に次ぐ勢いである。GAJでは「皮だけ」に「ホド」が分布するのは島根・山口・広島県下だけである。「バカリ」と「ホド」の関係については柳田(1992)に指摘があり⁴、「ホド」は「バカリ」よりも新しい助詞で、やはり程度から限定へと移行するが、文献資料では限定の用例報告がないという。

しかし、当該方言「バー」の担う意味機能が程度と限定にのみとどまっているかどうか、厳密にはその判定が下しにくいという状況があることも事実である。限定すれば自然に強調へ向かうところから、「雨ばかり(降っている)」には限定・強調の両機能が認められやすい。高橋(1996)には限定から強調への移行を示す回答が含まれているが、質問方法に起因する問題と限定と強調の弁別の難しさを考えさせられる⁵。この点については、GAJ(解説 1 p.205)も注意を喚起している⁶。

4. 中国・四国地方の「バー」とその関連事象

おもしろいのは、GAJでも見たように、四国と中国とのちがいはあってもきわめて近い距離にありながら、岡山の「バー」と高知のそれが限定・強調と程度で分かれてしまうという点である。町(1987)には広島・岡山県境域の状況が詳しい⁷。程度から限定・強調への移行がこの一帯でかなり進んでいることがわかる。

そこで、先行研究によって瀬戸内海を中心とした中国・四国地方の状況を把握してみよう。藤原(1974, 1976 a, 1977)の一連の記述の中に指摘がある⁸。

高知県浦の内は高知市の西に隣接しており、すでに見た高知市や四万十川流域と同じ状況を示す。高知県の北東に隣接する徳島県平谷でもきわめて類似した状況が見える。しかし、香川県滝の宮ではこれがとぎれ、瀬戸内海の岡山県真鍋島に再び類似性がたどられるものの、対岸の岡山県内陸部に入ると、限定・強調の用法に変わっていく。瀬戸内海の様子はやはり藤原(1976 b)に詳しい⁹。高知県下と相違するのは、少年層に弱くなっている点であろう。若年層への継承がすでに20年前から危ぶまれたことがわかる。高知県では指示語に下接するさい「バ(ー)」が「パ(ー)」へ変化する現象が観察されたが、若年層ではこれがさらに短縮されて、「コッパ」「ソッパ」「ドッパ」の言い方までできているほどである。当該方言では弱くなるところか、音を少し変えながら当世風に作りかえているのは若い人たちなのであり、この変化は方言の自己改新と見てもよいように思われる。「パ」の効果については、陣内(1998)の「ちゃぱつ」という新語に関する意見¹⁰が参考になる。しかし、「ばかり」から「バー」さらに「バー」への音変化のプロセスを説明するためには、高知県を含む四国・中国あるいは近畿地方にまで広がる関連事象を整理する必要がある。

高知県方言における「バ(一)」の隆盛は周辺に見られる「バ(一)」の残存と無縁ではないはずだからである。

まず、方言辞典・方言集の記載から見てみよう。金沢(1976)『阿波言葉の辞典』は次のように解説する。

バー【助】(副助詞) ①程度をあらわす「ビャア」ともいう。すくないときに用いるのが多い(山分)(やや古) コレバァアル木ハナイカ〔大きさのこれ位ある木はないか〕
②だけ。これ以外の範囲は含まぬ
水バァノンデモ生キラレル〔水だけのんでも生きられる〕 小豆バァツクル〔小豆だけ作る〕

藤原(1976)の徳島県平谷は山分に属する集落である。藤原が「徳島県下の要地としては、県南域(ミナミガタ)をねらっていた。高知県下との脈絡が、こちらの山地域ではどうなっているかが、私の関心事だったのである。」の予測どおり、高知県との連続性がたどられるものの、金沢の記述によって、高知県に隣接した山分では程度を表す意味機能が弱化し、限定機能に移行していることがわかる。近石(1976)『香川県方言辞典』ではどうか。

ば・ばー(助) くらい。その分量だけ。(二つばあくれ。高見島 八百五十円ばくいこんどる。高見島 もちを七つばあたべた。仲南。十円ばの下さい。和田 五十円ばつか。伊吹)

ば・ばー(助) その事ばかり。ばっかり。(あそびばあせずに勉強せえ。小豆島四海 ぜにばつかうな。小豆島豊島 船場ばへ遊びにいくな。小豆島四海 雨ばあが降る。小豆島四海長浜 内ばあで居らずに遊びにいけ。四海 わしにばあさせやがっておどりゃ家のうちのことさ いろいろにしくさらん。豊島 泣きばあするんか。小豆島北浦)

意味機能の主軸は程度から限定へ移り、さらに強調の用法が特立されるほど多くなっていると推察される。愛媛県東予地方西条市の方言集、久門(1974)『言葉の自然林』を見よう。

ば(接尾) はかり(量)一ばかり(助詞一接尾)一はか(助詞)の略。⇔はか 参看 ○代名詞
「あれ・これ・それ・どれ」、その他「えー」など若干特定の語に接して、その語を名詞とし、その分量・程度または有様などを表はす。又「どーする」に接して、余裕の程度を表はす。この場合は、下は「……もない」と否定形を以て結ぶ。
例 これば遣ろ」そればでよかる」あればか無い」どればにするか」えーばはたらく」ちーとこば呉れー」少少内ばに入れる」どーするばもない」ここに十本ばある。

高知県でもさかんであるが、指示語を中心にした用法へ縮小されているようである。「どーするばもない」は、その結果、定着した慣用表現と考えられ、程度から限定への移行行きを映している。さらに、瀬戸内海をわたって対岸の広島県福山地方の方言(高橋(1986))では、限定・強調の意味機能の主力であることがわかる¹¹。また、『瀬戸内海方言辞典』には、程度・限定・強調の用例の記載がある¹²。しかし、階層・頻度・品位において、程度〈大おもに中以上 やや少 やや下〉と限定・強調〈全 普 中〉を比較すると、やはり前者の衰微は否みがたい。

以上のように、方言辞典・方言集の「バー」に関する記述を総合すれば、程度の用法は衰退の

一途をたどりながらも、一方では限定・強調の機能への転身をはかりながら、中国・四国方言に根をおろしているものと判断される。友定(1994)の大阪市から徳島県阿南市まで24地点のグロットグラム、[100円ほど] [雨ばかり] を対比すると、「ほど」には全く見出せないが、「ばかり」には、「バー」が淡路島津名町の60代以上、洲本市の40～50代・20～30代・10代、緑町の60代以上・10代、三原町の60代以上・40～50代・20～30代、さらに南下して南淡町では60代以上・40～50代・20～30代・10代まで「バー」の使用が認められる。限定・強調の用法が大阪と徳島の間に位置する淡路島にあり、すでに見た瀬戸内海を中心にした「バー」の分布の東端の姿を浮き彫りにしているようである。ここで注目されるのは、「バー」の関連事象「バーイ」「バーリ」「バーヤ」(各々6・1・1地点)である。北は淡路町から南は徳島県大毛島・那賀川町まで範囲が「バー」よりも広い。少ないながら「バー」を北と南ではさむような分布を見せている。

これらの関連事象が高知県方言の「バー」の意味機能を考察する上でも欠かすことのできない事象であることは、すでにGAJの分布でも明らかであろう。

藤原(1990)の(Ame)—bakari には[ba:]が備後・備前に多数、淡路南部・高知・徳島にもかすかに分布するが、[bai][ba:i]が愛媛県中予・東予および淡路島北部に散在する様子が観察される。とくに東予と淡路島の分布は[ba:]と接しており、[bai][ba:i]から変化して[ba:]となった蓋然性がある。さらに、『阿波言葉の辞典』には「バリ バカリ(山城)」とあり、東北地方に広く分布する「バリ」と同じ事象の存在を示唆している。

以上に見られた、淡路島の「バーイ」「バーリ」、中予・東予および淡路島北部の「バイ」「バーイ」、阿波の「バリ」「ビャア」と、高知県の「バー」関連事象との相互関係を整理すると次のようになる。高知県方言においては、バーが程度・限定機能をバが強調機能を担っていて、両者はあたかも棲み分けているように観察される。

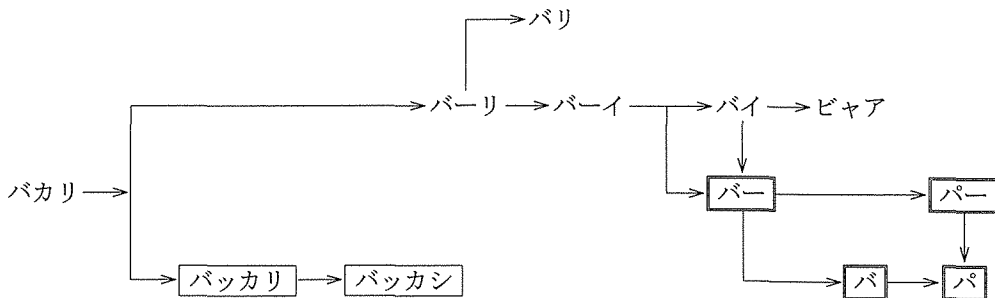


図3 「ばかり」の音変化過程の想定図

5. 議論

「ばかり」から変化したと考えられる「バー」は、このように高知県方言においてきわめてさかんな副助詞であり、その関連事象と分布に目を向けると、中国・四国地方はもとより、近畿以東の分布をも射程に入れる必要が出てくるだろう。GAJの東北地方の「バリ」の優勢は、京都を中

心にした古い「ばかり」の周圏分布の東側部分と見られなくもない。瀬戸内海を中心にした中国・四国地方が、東北地方のまとまりある分布に比べて、語形・分布相において複雑化しているのは、小林(1998a)の指摘する「アンバランスな周圏分布¹³⁾」の一例と考えることができる。

しかし、「西端」を九州と見るか、四国と見るかは、西日本の地理環境によって単純ではない。私見を加えるなら、瀬戸内海を内包する西日本の地形の複雑さは畿内からの直線距離だけでは説明がつかず、瀬戸内海を通路とした九州への言語路が四国山地に阻まれた言語路よりも近いと考えれば、「バー」の古態性を難なく説明することができる。いずれにしても、東日本における関東から東北地方へかけての比較的スムーズな浸透よりも、はなはだ遅れをとっているのが西日本のおおまかな傾向と言えるのではないかと思う。言語の伝播は歴史的・地理的・社会的背景を十分に考慮する必要がある、網野(1997)の社会形成過程の東西差に関する通時的考察¹⁴⁾が参考になる。程度から限定・強調を意味する GAJ 4 枚の分布図(図1)を、東西差の分布図として見直すと、「バリ」の勢力は、

50 百円くらい 48 (食って) 寝るだけなら 47 皮だけ 49 雨ばかり

の順序で大きくなっている。つまり、これは「ばかり」の経てきた意味機能の推移に合致した勢力の断面で、少なくとも、高知県方言の「バー」の推移よりも新しい段階にあるものと判断される。また、東北地方が「バリ」一色でないことは、例えば、佐藤(1997)の、大正生まれの三人の女性話者(A B 9年生 C 4年生)の談話資料で、「バリ」だけではなく「バレ」も用いられている¹⁵⁾点に明らかである。

しかしながら、東北地方では瀬戸内海を中心にした中国・四国地方における音変化形のバリエーションには及ばない。意味機能の推移の緩やかさと音変化形の多彩さが密接不可分の関係にあると見てよい。したがって、小林(1998b)の見解¹⁶⁾は、副助詞「ばかり」の場合にもあてはまる。小林は格助詞「サ」の事例を、「東日本方言は西日本方言に比べ、日本語として新しい段階を示しやすいのではないか、一見古そうに見える言葉でも、東日本独自の「再生」を果たしたものが多いのではないか」という提言の論拠としているが、高知県方言の「バー」は古態の自己改新の結果、「バ」「パ」への短縮をはかることによって高知県に限定されるものの、「サ」にも類似した発展傾向を呈していると見られる。また、井上(1997)の中学生の回答結果では、「小づかいを百円くらい使った」において、秋田はBARI 10%、高知はBAA 15%で、しかも高知のGURAIは50%という全国で最も低い率にとどまっている。少年層においてすら「バー」への根強い支持が認められることの端的な証左と言えよう。

なお、「バー」をめぐる、愛媛・香川・徳島の「ドコバレ(バリ)」「ダレバレ(バリ)」が関連をもつのではないかという見方がある¹⁷⁾が、管見では、別の文法現象ではないかとの見通しをもっている。『高知県方言辞典』によれば、「だれんばれ」「だれんまり」(ともに連語)が「誰彼の区別なく誰でも」の意味に用いられ、その出自を「(「誰にもあれ」の転訛か)」とし、藤原(1997)『日本語方言辞書 下巻』には、「ダレマリ」を「そうそうだれもが(——あとに打消の言いかたが来る)愛媛県中部西岸」とある。『香川県方言辞典』にも、「どこばり・どこばれ (句) どこにでも。後に否定詞を伴う。」「だればり・だればれ (句) 誰はあれ。誰でもは。」とあり、そうであれば、こ

れもまた古態をとどめる文法現象の可能性が高い。副助詞「バー」とは異なり、用法の固定化という残存事象の側面を色濃く反映しているようである。古い文法が西日本に残りやすいという傾向（金田一(1977)）は確かにこうした事象にも認められよう。

瀬戸大橋の架橋からすでに10年が経ち、昨春の明石海峡大橋に次いで、この春には本四連絡橋尾道・今治ルートの開通によって本州四国三橋時代が到来する。かつての大言語路、瀬戸内海を巡る西日本の言語伝播事情は21世紀に向けて大きく変わろうとしている。そんな時代に、岡山の人と高知の人との間で「五百円バー」の意味合いが一方は限定に他方は程度に受け止められ、相互の伝達に支障をきたす事態はどのように回避されていくのだろうか。時間的距離の短縮が方言事象の存立にどんな影響を与えていくのか、興味深い問題である。

注

- 1 ・「ばかり」の変化形（分量，比喻，状態などについて使用する）〈土居(1985)〉
・「何々ばかり」の「ばかり」に相当するもの〈藤原(1988)〉
- 2 程度の意は鎌倉時代以降「殿ホドノ大事ノ人ヲ」（『沙石集』）のホド（程）が受け持ち、バカリは「ただそれだけといふ意」（『大文典』），限定をもつば示すようになった。したがって「いかばかり」（『平家物語』）を「いかほど」に替えるのだが，数詞を承け新しく程度を表わす時はバカリの方がむしろ多いようである。（中略）副助詞は意味性が強いだけに，消長が激しいのであろう。なおバカリから「髪結びやうばっかりで」（『鍵の権三重帷子』）のバッカリ，この転訛形のバッカシ・バカシが出た。（安田(1977)）
- 3 ばーばー 許 ばかり 程 くらい だけ 「ソレバナコト ヨーセンカ」（それ位の事ができないか）「ホンノ メクソバー」（ほんの少しばかり）「スルバモナイ」（やる程の事もない）〈沖本(1981)〉
- 4 「バカリ」は，平安時代になって限定の意を表わすようになり，次第に「ノミ」にとってかわっていき，本来の大体の意でも用いられた。「バカリ」は，中世を通じて大体の意で用いられたが，やがて新しく用いられるようになった「ホド」に圧倒されていく。その「ホド」は，もと程度を表わす名詞で，活用語の連体形や助詞「ノ」に続いていたが，鎌倉時代になると体言にも自由につくようになって，副助詞化していった。（中略）室町時代末期には「ホド」と「バカリ」が併用されていた。（柳田(1992)）
- 5 「あの人は，うそばっかり言う」などという時，「うそ バー 言う」といういいかたをしますか。」の回答者が高知県をはじめとして徳島・香川・愛媛・岡山・広島各県に散在している。ホームページには回答者に関する情報が見られないため，現時点では参考程度にとどめておきたい。
- 6 この項目では，「いつもいつも（雨が）」という強調の意が中心であることが47図「皮だけ」のような明確な限定と異なっている。その意味では，本図は48図の「食って寝るだけなら（犬や猫と同じだ）」と通ずる面をもっている。もし，「毎日寝てばかりいるのなら，犬や猫と同じだ」という文脈で調査すれば，本図ときわめて近い分布が得られるのではないだろうか。（国立国語研究所(1989)）
- 7 “備後バーバー安芸ガラス”と言われ，備後域の代表的な方言語形とされるバーの分布を見る。沿岸部で安芸の竹原市吉名町，島嶼部で大崎上島東野町白水まで西進している。備北にはうすい。バーの分布状況で注目されるのは，芸南から備南にかけては，バッカリとの併存がなく1地点1語の存立であるのに，備央での分布には，バッカリとの併存地点が多くなっていることである。この地域では「バッカリは新しく，バーは古い」（甲奴町字賀）と言われるように，バーの勢力は弱

今後、バーは、芸南では西進し、備北では勢力を弱めていくものと考えられる。(Fig.6「～ばかり」)

8 ・当方言中、もっとも耳だたい副助詞は、「ばかり」の「パー(バ)」である。(文例省略)「パー(バ)」が、上のように、「くらい」「ほど」の意味をあらわすことが多く、加えて、また、「だけ」の意味をあらわすこともある。(高知県浦の内方言)〈藤原(1974)〉

・「～ばかり」の意で、「～バツカリ」「～バツカシ」がおこなわれており、「～パイ」がおこなわれている。単純な「バー」は見にくいのが、中国地域内に「バー」のいちじるしいのとの対比で、注目される。(香川県滝の宮方言)〈藤原(1974)〉

・ 当地方で、「バー」はよくおこなわれている。備後地方のとのつづきであろう。(岡山県旧二川村方言)〈藤原(1977)〉

「～バー」は「ばかり」であろうから、「～ホド」につれあってこれが分布するもの、むしろからぬことと思われる。

10 一般にカウンターカルチャーというのは、規範とか標準から意図的に外れようとして出てくるものですが、出現初期の「茶髪」もそのようなものではなかったでしょうか。振る舞いや格好などで日常性を破り、何か新しいものを主張するのと同じく、言葉の面でも、言葉のルールを破り、そこに、ある表現効果を出すことができます。詩や創作の世界では常日ごろ行われていることです。

11 ～ばあ ～だけ、～ばかり、《ばあばあ言うなあ備後ばあ》
 ～ばあ ～ぐらい、約《一丁ばあ行きゃあ＝百米ぐらい行けば》(少ない意をふくむ)
 ～ばあ 形容詞の強調 《さびいばあ＝とっても寒い》
 ～ばあがのおじやあにやあ ～だけで事足れりとしてはならない
 《言うばあが能じやあにやあ＝言うだけではいかん》(高橋(1986))

- 12 パー **副助** 生活一般 「およそ何々ほど」の「ほど」(くらい)に相当するもの(全おもに中以上 やや少 やや下) ○ヒャクメパー モラオー ガ。(百奴ほどもらおうかね。老女一店の主婦)
- 分布** 大・走・高・伊 内海東部中部小分布
- パー **副助** 生活一般 「何々ばかり」の「ばかり」に相当するもの(全 普 中) ○コンナガヒトリ ユーテ ミルパージャロー ゾイ。(あの男がひとりしゃべってみただけだろうよ。中男間) アノ コワ クワシパー クーテ、メジャー チューニ クワンノジャ ガー。(あの子は菓子ばかり食って、飯はとんと食わないだよ。中男一中女)
- 分布** 石・走 内海西部(藤原(1988))
- 13 周囲分布には、かつての畿内中央語がそのままの姿で均等に東西に分かれて残るという典型的なケースばかりではなく、伝播の途上で何らかの変容を被り、東西のバランスにずれが生じる場合も多いのではないと思われる。従来、伝播のモデルとして抽象的に理解されるきらいのあった方言周囲論が、日本語方言という具体的な土壌においてどのような形で実現されるのかを解明するために、このような東西がアンバランスな周囲分布の成立を論ずることは必要である。また、そのことは発展的には、中央からの言語の伝播に対する東日本と西日本の受容の違いというように、より大きな問題を考えることにもつながるはずである。(小林(1998 b))
- 14 国制・社会慣習における東西の差異は、15世紀末から16世紀にかけて、「高」を表現する基準になった流通貨幣、地域社会で用いられる暦・里制、穢れに対する忌避感の強弱、大名領国の知行制にもとづく軍役賦課の体制、奉行を中心とした官僚組織によって行われる領国内の統一支配のあり方などに深く及んでいた((下)87-91)と見ている。
- 15 B ドロ ツイダ ナエッコバリ(泥のついた苗ばかりを) A ヘゲノミンズバリ・ヘゲノミンズバレ(せきの水ばかりを) A オッキー タラバリ クッタバツテ(大きいタラばかり食べたけれど) B ソレバレ クッタダイナ(そればかり食べたものだ) C ソヤツテバリ ヤイデ クッタデバノ(そのようにしてばかり、焼いて食べたものだ) B ゼーデバレ クッタハンデ(膳でばかり食べたから)(佐藤(1997)) ※ 傍線は筆者
- 16 いずれにせよ、東日本は古典語の一掃に急である、ということが言えそうである。西日本の伝播は緩やかで、古態をあちこちに残しながら進行するのに対して、東日本では新しい言葉の普及速度が早く、一気に広まりやすいという傾向があると考えられる。(小林(1998 b))
- 17 柴田昭二氏(香川大学)は、私信において、アンケート調査結果・江戸時代の文献例を引いて、香川県下でのドコバレ(バリ)ダレバレ(バリ)…の言い方は、「ばかり」の限定の用法の固定化した表現の一つではないか、との見解を示された。

参考文献

- 網野 善彦(1997)『日本社会の歴史(上)(中)(下)』岩波書店
- 井上 史雄(1997)『社会方言学資料図集…全国中学校言語使用調査(1993-1996)』
- 岩井 良雄(1970)『日本語法史 奈良・平安時代編』笠間書院
- (1971)『日本語法史 鎌倉時代編』笠間書院
- (1973)『日本語法史 室町時代編』笠間書院
- (1974)『日本語法史 江戸時代編』笠間書院
- 上野 智子(1996)『四万十川流域言語地図』高知大学人文学部国語学国文学教室
- 沖本 樵児(1981)『渭南のことば』

- 金沢 治 (1976) 『阿波言葉の辞典』 小山助学館
- 金田一 春彦 (1977) 「国語史と方言」『講座 国語史 1 国語史総論』 112-200, 大修館書店
- 久門 正雄 (1974) 『言葉の自然林』
- 国立国語研究所 (1989) 『方言文法全国地図 第1集』 大蔵省印刷局
- 此島 正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描—』 桜楓社
- 小林 隆 (1998 a) 『日本語方言形成史論 1 アンバランスな周圏分布の成立』 科研成果報告書
 ——— (1998 b) 「文法から見た東日本方言の形成」『月刊 言語』 27巻 7号, 26-33, 大修館書店
- 佐藤 和之 (1997) 『五所川原市史 言語編』 五所川原市
- 陣内 正敬 (1998) 『日本語の現在——揺れる言葉の正体を探る』 アルク
- 高瀬 正一 (1985) 「副助詞」『研究資料日本文法 ⑦ 助辞編 (三) 助詞・助動詞辞典』 190-205, 明治書院
- 高橋 顕志 (1996) 『中国・四国言語地図』 (ホームページ版)
- 高橋 孝一 (1986) 『びんごばあ』
- 田中 章夫 (1977) 「助詞 (3)」『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』 359-454, 岩波書店
- 近石 泰秋 (1976) 『香川県方言辞典』 風間書房
- 土居重俊・浜田数義 (1985) 『高知県方言辞典』 高知市文化振興事業団
- 友定 賢治 (1994) 『大阪～徳島グロットグラム図集』 鳴門教育大学国語講座
- 西田 直敏 (1977) 「助詞 (1)」『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』 191-289, 岩波書店
- 橋本 進吉 (1969) 『助詞・助動詞の研究』 岩波書店
- 藤原 与一 (1974) 『昭和日本語の方言 第2巻 四国三要地方対照記述』 三弥井書店
 ——— (1976 a) 『昭和日本語の方言 第3巻 瀬戸内海三要地方方言』 三弥井書店
 ——— (1976 b) 『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』 東京大学大出版会
 ——— (1977) 『昭和日本語の方言 第4巻 中国山陽道三要地方方言』 三弥井書店
 ——— (1988) 『瀬戸内海方言辞典』 東京堂出版
 ——— (1990) 『中国四国近畿九州 方言状態の方言地理学的研究』 和泉書院
 ——— (1997) 『日本語方言辞書——昭和・平成語の生活語—— 下巻』 東京堂出版
- 町 博光 (1987) 『芸術接境域方言の方言地理学的研究』 溪水社
- 安田 章 (1977) 「助詞 (2)」『岩波講座 日本語 7 文法Ⅱ』 291-357, 岩波書店
- 柳田 征司 (1992) 「限定の意を表す副助詞の変遷—方言分布と文献資料から—」『日本語学』 11巻 6号, 118-130, 明治書院

付 記

本稿の主旨は国語学会中国四国支部第44回大会 (1998.11.14～15 山口大学) において口頭発表し、多くの方々の御意見ならびに中国四国地方の情報を得ることができた。心からお礼を申し上げる次第である。

(投稿受理日: 1999年 1 月 5 日)

上野 智子 (うえの さとこ)

高知大学人文学部
 780-8520 高知市曙町 2-5-1

The semantic functions of the auxiliary particle *baa* of the dialect of Kochi Prefecture

UENO Satoko

Kochi University

Keywords

auxiliary particle , *baa* , degree , limit , the dialect of Kochi Prefecture

Abstract

The auxiliary particle *bakari* was used to indicate degree from the Nara period (710-784) to the Muromachi period (1392-1573). Previous studies show that the function of this auxiliary particle gradually changed and came to indicate limit in addition to degree. Moreover, they show that nowadays *bakari* functions to indicate emphasis as well as limit. In the case of the dialect spoken in Kochi Prefecture, one finds the auxiliary particles *baa* or *ba* and *bakkari* or *bakkashi*, all of which are considered to be variants of *bakari*. The former indicates degree or limit while the latter indicates emphasis. Unlike *bakari*, *baa* or *ba* and *bakkari* or *bakkashi* of the Kochi dialect have their respective functions. In other words, these auxiliary particles have not undergone the semantic change that *bakari* has.

The characteristics of the auxiliary particle *baa* or *ba* follow.

1. *Baa* or *ba* is frequently used after ordinal numerals to indicate quantity such as length, weight, capacity, the number of articles, an amount of money, age, time and so on.
2. Apart from *baa* or *ba* used after ordinal numerals to indicate quantity, it can also be used in combination with various parts of speech.
3. *Baa* or *ba* following demonstrative pronouns is apt to be phonetically changed to *paa* or *pa*.

The auxiliary particle *baa* or *ba* of the dialects spoken in Chugoku and Shikoku surrounding the Inland Sea has a different semantic function from that of the Kochi dialect. In these areas, the function of *baa* or *ba* has been changing; it is mainly used for limit and emphasis rather than degree. The different use of *baa* or *ba* observed between Kochi Prefecture and the districts surrounding the Inland Sea draw our attention to the history of the auxiliary particle of the Kochi dialect. That is, judging from the fact that *baa* or *ba*, which is the phonetically shortest variant of *bakari*, is frequently used in Kochi Prefecture, the auxiliary particle seems to have been transformed into a kind of a new word.